
東方世界司記

Erius

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方世界司記

【Nコード】

N4334BA

【作者名】

E r i u s

【あらすじ】

普通の高校生として生活していた応条順時は、突然の交通事故で命を落としてしまう。しかし、その魂は……主人公チート・歴史改変等の成分を含みますので、苦手な方はご注意を。

第一話：与えられた選択肢（前書き）

はじめまして、E r i u sと申します。

先駆者様に感動を受けて書き始めた初心者なので、至らない点はあると思いますがよろしく願います。

第一話：与えられた選択肢

不運にも交通事故で亡くなった一人の男がいた。

特に出来ないこともなく、しかし完璧にできる物は無い、平均的な男だった。

彼の魂は偶然か必然か、幸か不幸か、世界を司る創造神の元へ流れ着いた。

これは、そんな彼の非常識に満ち溢れる物語。

……ここは一体どこなのだろうか？

何も無く、真っ白の様でも真っ黒の様でもある不気味な空間だ。

手は？ 足は？ 感覚すら無い。

目はどうなっている？ 何も感じない。俺は今、何も見えていないのか。

「おや……珍しいね」

声が聞こえるような気がする。耳はあるのか？ 感覚はない。空耳だろうか。

「……あ……？」

また何か聞こえたような……ん？ 聞き覚えがあるような……

……ああそうだ、これは自分の声だ。でも、俺に口は……

待て、口はある。感覚がある。なら、他のものだってあってもおかしくはない。

……全部の感覚がある！

「……初めてだよ。この曖昧な場所で自ら実体化できるなんてね」

どこからか言葉が聞こえる。だが、気にせず周りを見渡す。

……何も無い。ずっと白が続いているだけだ。

「……ここはどこだ？」

聞きたいことを言う。姿は見えないので適当な方向を向いて、だが。

「ここは連結空間。ここ自体は何も無い曖昧な場所だよ。でも、全ての世界はこの空間に繋がっている。だから、ここは無くてはならない場所。そして、創造神の僕の仕事場でもある」

どこからか聞こえる声。何を言っているんだ？

そんな思いに気が付いていないように、声は続ける。

「僕の仕事は、君みたいな珍しくここに迷い込んできた魂をどうにかするのが一つ。全ての世界を管理して、新しく創ったり消したりするのが一つ。最も、君みたいなのはあんまりないから実質仕事は1つだけだね」

やはりよくわからない。

「ああ、別に理解しようとしなくていいよ。多分無理だからね」

無理だと言われた。しかし、本当の事なので大人しく考えるのをやめる。

「さて、これから選択をしてもらおう。……喋れない魂しかいなか

「たからちゃんと選択させるのは初めてだよ」

「……選択？」

「そうだ。君には、2つの選択肢がある。まず一つ、このまま本来行くべきだった場所へ行く。もう一つは、転生して新しく創った世界の神を務める」

「……は？」

「……このまま本来行くべきというのは……おそらく死後の世界だろう。確かに俺は死んだはずだからな。
謎なのはもう一つの方だ。どういう意味だろうか？」

「あんまり深く考える必要は無いよ。僕が担当する世界の一つを君に担当させるってだけだから」

「……さっきの話と混ぜれば、なんとなく理解は出来た。話が飛んでいても、案外慣れるものなんだな。」

まあ、この状況でこの選択肢。もし出来るなら、このまま非常識を歩んでみたいものだ。

と言つことで……

「後者を選ばせてもらっ」

「……わかったよ。準備を始めるから、ちょっと待っていてくれ」

「……よく考えれば、こんな状況になっているならもう少し疑問を持つべきだろうか。

とは言っても、何も疑問に思えないので諦めるとする。

「……よし、これで終わりだ」

結構早かったな。何をしていたかは知らないけれども。

「ああそうそう、『君がやるべきことは本能に従うことだ』と言っておこっ。それじゃあ、行くよ」

「……相変わらず、よくわからない。その状況に置かれれば分かるだろうか？

「……最後に、名前を聞いてもいいかい？」

「おつじょうじゅんじ応条順時だ。どうせもう使わないと思うがな」

「そうか。ありがとう、応条順時。僕は……そうだな、『オーレイルド』とでも呼ばせてもらおうかな」

そうこう言っているうちに、俺は光に包まれ始めた。

これからどうなるかなんて分かったものじゃない。

でも、非常識に足を踏み入れるのは確かだろう。

ならば、空想でしかなかった事とことん楽しもうじゃないか。

そんなことを考えている内に、俺の体は消え去っていった。

第一話：与えられた選択肢（後書き）

導入話となります。短いです。

第二話：動き出した世界（前書き）

主人公が全力で考えます。短め。

第二話：動き出した世界

土の茶色と空の水色しか見えない場所に、彼は立っていた。白とも灰色ともつかない銀色の髪に海の底のように深い紺色の瞳を持ち、下の無い灰色の小袖の上に黒い羽織、深い藍色の袴を穿いているような格好をしている。

「……はてさて、どうしたものか」

十代半ばから後半程度に見えるが、その声は見た目に反して低かった。

少年はそのまま考え込むように胡坐を掻いて地面に座る。

「……ん？」

と、少ししてから少年は何かに反応した。

ずっと立ち上がったと思えば、全身に力を込める様にし……

「……あああああああああ！！！！」

叫んだ。少年はその後、すぐに意識を飛ばしたようだった。

Side Change

起きると、朝だった。一日経ったと言うのが感覚で分かる。

しかしなんだろう、ずっと何か体が出たり入ったりしているような感じがする。少し気味が悪いな。

……ああ、これは情報なのか。世界中の。読み取れるのだろうか？

「……っ」

……だめだ、情報が多すぎて頭が痛い。

的確に、必要な情報だけ拾えるようにしなければならぬようだ。

ああ、そうだ。昨日俺は何をしたんだったか。すぐに意識が飛んだから……

と、周りを見渡してみる。

「……！？ おお……！」

美しい。俺が言うのは不釣り合いかもしれないが、そういう他無かった。

草、山、海。どれも見たことのあるものだが、ここでは輝いて見える。

ところどころに木も生えている。自然はやはり、美しいものだ。

具体的に何をしたかは分からないが、おそらく俺は本能に従い、この世界に命を吹き込んだのだろう。

とは言っても、この星だけだろうが。太陽が見えるので、宇宙があり他の星があるのは間違い無さそう。

……世界の神ってどこまで守備すればいいのだろうか？ 俺に何ができるのか分からないが、他の星とは……

と、ここで分身という言葉が浮かぶ。そうか、分身！

……ってちよつと待て。そんなのどうやって……

ん、また何か……目を瞑り集中。いったいどうなると……

現実と幻想を操る程度の能力

……なんだこれは？

……ふむ、感覚ではわかるが言葉では表現しにくいな。

うーん……まあ単純に言えばなんでもできると言う事だろうか。

ただし、力はいらないほど消費すると。昨日のあれが良い例だろう。

つまり分身みたいなことはできるのか。でも、昨日の惨状を考えるとあまりやりたくないな……

……気になることが多すぎるな。限が無いような気がするから一旦やめよう。

とりあえず、適当に住処ぐらいは作らなければな。一日経ったにもかかわらず腹が減ってないあたり必要ない気がしないでもないが……まあ別に人間と同じ暮らしをしても問題はないだろう。……発想が既にこっちの世界のものになってるな。別の環境にすぐ馴染むのが特技だけど、まさかこんな状況で役に立つとは。

とは言うものの、周りには山やら木やらしかない。なんかこんな状況から始まるゲームがあったような……

ん？ ゲームとは何だったか……俺ってこんなに物忘れ激しかったか？

まあいいか。で……神様と言えば神社だと思う。俺の偏見かもしれないが。

だから神社を建てようそうしよう。神社とは名ばかりの、中身が普

通の住居になるのは確かだが。
神社を見て回るのは好きだったから、外観はなんとかなると信じた
い。

考えることが多すぎた世界神だった。

第二話：動き出した世界（後書き）

最初の主人公の容姿で3時間ぐらいかかりました。和装わからない……orz

第三話：始まっていた日本神話（前書き）

日本神話成分入ります。とはいっても、自分なりに解釈してたりするところもあるので気になる方はご注意を。

第三話：始まっていた日本神話

大きな湖の横に建つ神社がある。

外観は普通の神社だが、中だけ見ればきつと「旅館でも経営するのか？」と誰もが思うだろう。

建てた当の本人にそのつもりはないが、余りの空き部屋の数にそう思わざるを得ない。

時の流れははやいなと、もう人ではない体で思う。

体感としては、ついこの間まで神社を建てていたように感じるのに。自身の感覚は、すっかり一万年経ったと告げている。

何時の間にやら一万年。今まで俺がやってきたことといえば、初日のあれと神社建設ぐらいなものだ。

一応情報読み取りの練習はしてきたが、それ以外は本当に何もやっていない。

前世の通りなら人間が出てくるのは何億年とかかるからその程度誤差だろうとは思うが、何となく無駄にした感拭えなかった。

と言うことで、今までしていなかった確認事項の確認でもするとしてよう。

……とは言っても、よくわからないことが多いのだが。

まず、身体を廻っているものについて。情報とは別の、何かもやもやするものが廻っている感覚があるのだ。

操れるのだろうか？ ……操れるらしい。

放出できるのか？ …… できるが疲れる。

見えるか？ …… 放出すれば見える。

…… ふむ。わからん。何だこれは。

次、身体能力について。

神社の土木工事はかなり楽に出来たが、実際はどこまでできるのだろうか。

…… 結論を言えば、木を蹴って倒すことと石にひびを入れる程度だった。

それ以上の何かがあればいいのだが、生憎何もないので出来ない。

最後、他に何かいないのかと言うこと。

生物はともかくとして、他の神やらがいてもおかしくはない。

情報読み取りの練習ついでに何か情報がないかとやってみたが、やはり大雑把なものしか読み取れない。

…… 直接行くのが早いだろう。どうせやることはないからな。

直線状にかなり歩いた。そこまでは何も無かったが、通り過ぎようとした瞬間近くにあった山と山の間、不自然な道ができているような気がした。

形が変なだけであれば気にはしなかったが、何と言うかこう……とにかく何か不自然。

当てもなく歩くよりは行ったほうが良いに決まっているので、行くことにする。

道の先は、一見何の変哲もない草原だった。だが、よく見るとここが浮いている…… 若しくは山の頂上であるかのように周りに雲があり、雲があるところから地面は無かった。

その見た事もない不思議な光景に気を取られていると……

「クニノトコタチ様？」

突然、背後から声が聴こえる。

「ん？」

振り返ると、若干驚いた顔をした女性がいた。

「よくここが分かりましたね……ああ、失礼しました。私はアマテラスと申します」

「……どういうことだ？ 話が全く読めないのだが」

「まあ、そうでしょうね。クニノトコタチ様は地上に生まれたと聞きますので。まず、ここは天界、神の住む場所です。しかし、クニノトコタチ様は天界のできる前に生まれた故に、地上にいるのですよう」

「……そのクニノトコタチ、というのはなんだ？」

現時点で最も気になるところだ。こつちの世界での名前がまだないのも考えて。

「私達が勝手に付けた名前ですわ。由来は、私にはわかりませんが」

「ふむ……ところで、その敬語をやめてはくれないか？ なんとなくか、むず痒いのだが……」

「無理な相談ですわ」

この一言しか言っていないのだが、これだけでもやめる気が全く無いのがわかる。

「じゃあ、理由だけでも頼む。よくわからないままに敬われるつもりは無い」

……この言葉だけだとかなり上から目線な気がするな。実際はむしろこっちのほうが下のつもりなのだが。

「クニノトコタチ様が一番最初に生まれたからですわ。それに、世界を動かした……いえ、動かしているのも貴方様と聞きます」

そういえばよく考えると俺ってすごいことやったな。しかし、『神』に敬われるとは……なんとも複雑な気持ちになるな。

あ、世界を創り出したオーレイルド……だっけ？ はもっと凄いじゃないか。ここにはいないけど。

……ん？

「……誰か来るぞ？」

「……ッ、まさか！？」

遠くに、誰かがこちらに向かって歩いているのが見える。

「ここを奪いにきたのかしら？だとしたら……」

「いや、待て。敵意はなさそうだ」

今の発言的に、アマテラスはここを治めているのか？

……ってそれはどうでもいいな。取り合えず、向こうに争う気は無さそうだ。

「何か構えてるわけでもないし……」

「……」

少し緩んだが、相変わらず警戒し続けるアマテラス。
やがて目の前に来ると……

「……あら、スサノオじゃないの」

「やあ、アマテラス。……どうしたんだい？」

「申し訳ないんだが、少し警戒中だ。ここを奪いにきたわけじゃないんだろう？」

「クニノトコタチ様！？……いえ、失礼しました。そんなつもりはありませんよ。アマテラスに挨拶しに来ただけです」

スサノオと呼ばれた男は、やっぱり俺に驚いた。相変わらず気分は複雑だ。

「……だそうだが？ アマテラス」

「……ええ、わかったわ。ごめんなさい、スサノオ」

ようやく、アマテラスも警戒を解いた。ここまでするということとは、過去に何回かあったのだろうか？

まあ、それは詮索してまで聞くようなことでもないだろう。それより、親しいみたいだから黙っていようか。

「別に気にしてないよ。むしろ、軽い用事で警戒させた僕が謝りたい位だ」

「……用事は挨拶と言っていたけど、どこか遠いところへ行くのかしら？」

「ご名答。用事はそれを伝えること。それじゃあ、またね。クニノトコタチ様もお元気で」

そう言い、スサノオは去っていった。

「そういえばクニノトコタチ様は、靈力、妖力といったものをご存知ですか？」

スサノオを見送って少ししてから、アマテラスは俺にそう聞いてきた。

「……いや、知らないな」

思い当たる言葉がないか考えるも、それらしきものは無い。

「やはりそうでしたか。少しお時間をいただいてもよろしいですか？」

「どうせ暇だから別に構わないが……」

「では……」

アマテラスは、説明のために語りだした。

・ 共通

技量にもよるが自在に操れる

身体に溜まり、使ったりすることで減少する。

特別なもの以外は自然回復する。

体力と同様、鍛えて増やすこともできる。

・ 霊力

今のところ神のみが持つ。神の命は神力なので、こちらは無くなってもなんとかなる。

かなり汎用性が高い。

他のものに比べて少し非力。

・ 妖力

その名の通り妖怪のみが持つ。妖怪の命でもある。

攻撃的で荒い。

持つものの性格が個人差はあれど荒くなることが多い。

力はあるが、技量が無いと生活には不向き。

・ 魔力

今のところ自然に関する妖精、それと植物もほんの微量ながら持っていることがある。しかし、無くなっても死ぬことは無い。妖精が死ぬのは、依存する自然がなくなった時。

大体のことはできる。

気まぐれで言うことを聞きにくい。

使いこなせれば相当な強さ。

・神力

全体的に特殊。

その名の通り神のみが持つ。神の命でもある。

大体のことができる。

持つてる本人のみにしか扱えない。

↓持つてる者によって種類が違う

信仰によって強くなっていく。回復もする。

神のみが持つとは言うが、実際は信仰され続けられれば誰でも持てたりする。

随分詳しく話したな……記憶力が上がってるのか、大体覚えてるけど。

まあ何にせよ、疑問は一つ解決した。最初の疑問だ。

「……さて、俺も帰ろうかな。またいつか」

「ええ、ではまた」

天界なんてものがあつたとはな。これから、何度も関わるような気がする。

微笑むアマテラスに見送られつつ、俺は帰っていった。

自分を敬う仲間が見つかった世界神だった。

第三話：始まっていた日本神話（後書き）

説明文が結構ありますが……おそらく、この序章はこんな感じで進むと思います。

第四話・隠れた活躍（前書き）

時間をさっくり飛ばします。

第四話：隠れた活躍

時は瞬く間に過ぎ去ってしまう。

ふとアマテラスを思い出して懐かしいなと思ったところには、既に一億年程経過していた。

まあ、もう慣れてしまったが。むしろ百年までならこの前の事、と自分で考えている。

それは置いておくとして、今はそれよりも重要なことがある。隣の湖だ。

急に何かの気配を感じて駆けつけてみれば……

「……妖精？」

そう、妖精が湖岸に二人大の字になって寝ていた。

……それだけなら気にすることはないのだ。珍しくはあるけれども余りに、強い。二人から放たれている力は、妖精とは……いや、そこらの妖怪とすらも比べ物にならないほど強い。

感じる気配は妖精そのものだ。だが、俺のように強い力のせいで妖精には……

「……あ」

……原因は、俺かもしれない。

力の放出を防ぎ、妖精二人を連れて帰る。
そして、神社の空き部屋に連れて行く。

おそらく、原因は俺の力が長い間に湖に当たっていたからだろう。
それこそ一億年程。何が起きてもおかしくは無いな。

……神力は神によって違うんだっただな。その神力が原因って事は……

「……俺が親!？」

つと、つい声を張り上げてしまった。

起きてきよんとしていた二人の妖精がびくつとする。

「……すまない」

かなり申し訳ない気持ちだ。謝罪の言葉は、無意識に出ていた。

改めて、二人を見してみる。

片方は……青いな。冬に見たら寒そうだ……というか実際寒い。氷の妖精か何かか？

もう片方は……青を調和する明るい緑だ。服は青いが……どちらかと言えば緑が目立つ。

どちらも、身長は俺より頭一つ分ほど低い。

さて、どうしたものか。

本来、妖精は自然と繋がって生きる。だが、この二人は力が強いので正常に繋がっているか分からない。

強い力が繋がりを阻害している可能性も無きに非ず、と言うことだ。もつとも、俺は妖精じゃないので詳しくは分からないが……

……そんなことより、先ずは呼び方だな。いや、重要だが何時までも二人と呼ぶわけにもいくまい。

と、青い方が黙っているのを気になったのか……

「父さん？」

今度は俺のほうがびくつとなった。

何と言うか……無駄に罪悪感が。
というか、分かるのか？

「……正確には違うと信じたい。そういえば、名前は？」

「チルノだよ！」

「そっちは？」

「……」

と言うと、緑の方は顔を伏せてしまう。名前がないのだろうか？

「……ふむ。じゃあ、大妖精と呼ばせてもらっていいか？」

妖精の上として、大妖精。これといった固有名詞の名前を付けるのが苦手なのもあるが、後に自分で決めてもらったほうがいい気がしたのが大きい。

……無責任？ 重々承知。

「はい！」

と、急にパツと顔が明るくなる。そんなに嬉しいのか。

「……離れる気は無さそうだな。それじゃあ、これからよろしくな」

「父さんなのに何言ってるのよー。まあでも、よろしくー!」

「よろしくお願いします」

ふむ、色だけじゃなく性格もお互い調和している感じだな。

取りあえず、何ができるのか知りたいのでいろいろやらせてみたのだが……

「チルノは力で、大妖精が知識か……」

どうやら出来ることまでお互いに丁度いいらしい。

二人で一人って感じだな。双子か? ……似たようなものか。

「さらに、チルノは能力持ちと」

流石に能力は片方だけらしい。毎日練習代わりに生息する生物の情報を探るのだが、能力持ちは滅多にいない。

……とはいっても相変わらず正確には拾えないので間違っているかもしれないが。いい加減慣れたいものだ。

「……はあ、流石に疲れるな」

疲れると言っても、精神的なものだが。

チルノと大妖精のどちらも、俺の知ってるようなことは知っていたので、やはり原因は俺だろう。

……ってそうじゃなくて、知っていたおかげでマシではあったが。

取りあえず、寝よう。やりたいことはあるが、疲れていてはできないからな。

翌日。朝食を取ったりした後、一人で外へ出ていた。

理由は簡単、新技術の練習だ。

この一億年間何もしてこなかったわけじゃない。やってきたことの一つが、これだ。

……まあ実際やったのは法則の作成なのだが。能力やらの練習がてらに作ったのだ。

作ったのは基礎だけで、応用力と技術力があればいろいろなことが出来ると思う。

草の上に座り、集中できる体勢をとる。いろいろと応用が利く代わりに、集中が必要不可欠なのだ。

指先に力を集める。そしてそれを保ちながら、前に手を伸ばす。量が増えても減ってもいけない。

そして、俺が術式と呼んでいるものを書いていく。

出している量が少なくても、恐ろしいほど力を使うので出来るだけ急がなければならない。かといって焦れば、集中が切れる。

術式は、線で書く。一本一本の位置が意味を持つので、ずれるのはもちろん書き順を間違えるのは以ての外だ。

……完成。作ったのはもつとも単純な簡易結界だ。早く作れる代わりに、耐久性と持久性は最悪だ。と言う間に、消えてしまう。戦闘中なんかは便利そうだ。

さて、記録するでしょう。誰かに教えるときのため……あと、俺の備忘録用だ。

後もう一つ、やったことがある。
それは……

「トコタチ様、お呼びですか？」

「まだ呼んでないんだけど。というか、いい加減その敬語を……」

「従者です。そうでなくても、世界の神ですから」

全く、どいつもこいつも……
って違う。愚痴るためにやったんじゃない。

……こほん。おれがやったことと言うのは、前に考えた分身だ。とは言っても、自分が増えるのは気味が悪いので見た目を変えているが。

……つもりだったのだが、何を間違えたか女性の完全な従者になっ
てしまった。

いや、むしろそれだけならいいのだが……

なんと、無駄な勘のよさと素晴らしい程のナイフ投げを持っている。
……やる時に考えたことと言えば、仕事を任せられる分身だけなの
だが。

いや実際任せているが……うぐぐ。

……諦めよう。

名前は本人曰く、一夜永想ひとやえいそうと言っらしい。

さっきも言ったが女性だ。

普段は宇宙を飛び回ってもらっている。

俺が行けばいい……とも思うが、俺はここに住地球んでいるからな。そ
して離れる気もない。

自分勝手もいい所だと自分でも思うが、これぐらいのわがままは許
してほしいとも思う。

「……で、結局どうするのですか？」

「悪いね、俺が全部言っちゃったからもう終わり」

「はあ。それでは戻らせていただきますね」

……性格は若干捻くれているが、俺に対して何かするときには絶対に
無感情らしいので、これと言って反応はない。
完璧と言っかなんと言っか。……従者だなあ。

あまり語られないけれど、影で結構がんばっている世界神だった。

第四話：隠れた活躍（後書き）

主人公も苦勞します。おそらく、話が進む毎にどんどん年月が飛びます。

第五話：増えた住居人（前書き）

あの方の登場。

第五話：増えた住居人

二万年ほど経った頃のある日のことだ。

チルノや大妖精に教えたかった基礎的な事は全て教えられた。

俺についてやら術式についてやら。

まあ、ある程度俺の知識があつたのでそんなに大変ではなかったのだが。

……ちなみに、大妖精についてだが、本人に名前を考えようと言ったところ……

「何を言っているんですか。私の名前は、大妖精ですよ。お父さんにとつては仮だったかもしれませんが、私はこれが気に入っていますし」

と、見事に反論されてしまった。気に入ってるから良いのかも知れないが、やはり罪悪感が湧いた。

「^{たち}立？」

「ん、悪い悪い。少し考え事をしてた」

俺は今、チルノと大妖精に術式を教えている。

さつきも言ったとおり、基礎は終わっているが。

立というのは、俺の名前だ。誰からもクニトコタチと呼ばれるのは嫌なので作った。

苗字も合わせると、^{てんじょう}天常 立だ。

天は……まあいろいろなところから。天界とか。

常と立は、くにのじたち国之常立から取ったものだ。

アマテラスに教えてもらったのだが……漢字があることに驚きだ。神が住むだけあっていろいろと凄いらしい。

「……立さん？」

つと、今は別に名前関係なかったな。

顔をあげると、困ったように大妖精がこっちを向いている。

「……すまん」

「……」

質問があれば答えつつ、情報を拾って地球を見る。

……何度も見ているが、やっぱり俺の知る地形と違う。極単純に言えば、陸と海が半々に分かれている感じだ。

そんなことを思いつつ、情報を拾う範囲をこの周辺にする。

「……む？」

した瞬間、細かくは分からないものの強い何かがあるのを把握した。

「？ どうしましたか？」

「悪い、少し出かけてくる」

「……いつも大変ですね。いつてらっしゃい」

障子を開け、文字通り飛び出る。この前、靈力で飛行できないか試してみたら思いのほか簡単に出来てしまったのだ。

大妖精のいつも、というのは大体合っている。大体三日に一回程度、場合によっては一日に一回もこうやって家を出るのだ。

仕事なのを理解してくれているので、大体何をしていてもこうやって言うてくれる。うれしい限りだ。

もっとも、チルノの方は不満を溜めているみたいだが……適当に時間があればいいのだが……

つと、目的地へ付いた。ふむ、この辺は森か……さて。

……ん？ これは……

「……妖怪か」

ボソツと一人呟く。微妙に、今までのとは違う気がするが……

少し移動して妖怪の近くまで来た。どうやら人型らしい。

パツと見、金髪で紫の服の少女だ。長い間歩き続けていたのか、汚れた服とふらふらした歩き方が目立つ。

……なんでだ？ 何かから逃げているのだろうか？

それにしても、何かを探し回っているように見える。

……もう少し情報を……

ガサツ

！しまった、音を立てたら余計に警戒される！

「誰！？」

「落ち着け、怪しい者じゃあない」

「っ……」

おう、物凄い睨みつけられてるんですが。でも、その格好じゃ威圧も何も無いんだがな……

「はあっ！」

つと、ボーっとしていたら殴りかかってきた。

「……ふむ。確かにその力ならこの辺の妖怪には勝てるな。圧勝は無理だろうが……ぼろぼろなものもそのせいかな」

「なっ!？」

残念ながら、拳は俺の手で受け止められている。少し面倒くさいので、ついでに硬直させる。

「……なんか、事情がありそうだな。本心から戦いたいわけじゃ無さそうな辺りが」

「なんで動かないのよっ……」

「別に危害を加えるつもりは無いからな。取りあえず落ち着いて、事情を話してくれないか？」

「……オーレイルド、という言葉に聞き覚えは？」

……ああ、その名前を聞いたのは何時振りだろうか。

「知ってるも何も、この世界と俺を創りだした張本人なのだから」

「……あなたが、そうなの？ 応条 順時」

「今は”違う。俺は、天常 立だ」

「そう、なのね……」

フツと、糸が切れたように倒れこんでくる。余程疲れていたんだろう。

……俺を探すために、何人の妖怪と戦ったのだろうか。まあ何にせよ、一先ず休ませなければ……良く見れば、傷も酷いことになっている。

少女を背負い、飛んで帰る。思いのほか軽かった。

「大妖精、来れるか？」

「あ、おかえりなさ……！？ ええっ、あ、急いで空き部屋に運ばないと……」

「このまま俺が運ぼう。治療は任せてもいいか？」

「はい！」

適当な空き部屋まで行く。その間にチルノとも合流し、三人で行く事になった。

チルノと大妖精に少し任せつつ、考える。

オーレイルドに関わりがあると言うことは、俺と同じ転生者で間違いないだろう。

俺を知っていたのは、オーレイルドが言ったからだろうが。

……しかし、オーレイルドもなんでこんな事したんだか。まあ理由は無くてもおかしく無さそうだが。

「ん……」

と、少女の声。治療は終わったようだ。

終わるのが早いのは、魔力の性質が治療などに向いているから。自分も何回か受けたのだが、本当に早く終わる。

Side Change

「ん……」

目を開けてみると、知らない天井があった。木でできていて、少し珍しいなと思った。

「おう、起きたか」

この声は……応条 順時……いや、天常 立と言ったつけ。
オーレイルドとかいうのに、まずはこの人に会えと言われて、やっ
と見つけた。

なんでも、この世界の主と同時に私と同じ転生者らしい。

「……ふむ」

その呟きで、ハツと我に返る。

周りを見てみれば、緑の髪の女子と、青い髪の女子が私を覗き
込んでいる。立とやらは、私を見て何かを考えているようだ。

……

「……ロリコン？」

「ん？」

思わず思ったことを口に出してしまった。

……が、立はなんだそれと言わんばかりにこっちを見ている。

「あなた、転生者なのよね？」

「そうだ。まあ、その前世の記憶はほとんど薄れてるけどな。……

ああ、チルノと大妖精は戻ってもらって構わない。ありがとな」

そう立が言うと、チルノと大妖精と呼ばれた女の子は部屋を出てど
こかに行ってしまった。

「……私はどうすればいいのかしら」

「好きにするといい。ここに住むならそれでもいいし、行く当てなく彷徨ってもいい。何にもないこの時代だ、選択肢はそれぐらいしかないよ」

どうやらこの時代は、私の想像ができる範囲を超えて昔らしい。

妖怪とか、神とか、信じられないものはたくさんあるけど……別世界だからだろうか？

……それにしても、どうするか、ねえ……

「私はこの世界について何も分からない。あなたについていく以外に、出来ることはないわ」

「……自惚れる訳じゃないが、それが賢明だろうな。正直なところ、あの力じゃこの世界で生き残るのは難しい」

「あなたが強すぎるだけだと思っただけど……」

「まあ、そういう話は後でいい。一先ず名前は？」

「……^{ゆかり}紫よ。苗字は無いわ」

「俺はさっきも言った通り、天常 立だ。これからよろしく頼む、紫」

「よろしくお願いするわ」

こうして、神社に妖怪が一人増えた。

仲間の男女比率が偏って行く世界神だった。

第五話：増えた住居人（後書き）

と言つことで紫登場。八雲の姓はまだないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4334ba/>

東方世界司記

2012年1月12日21時49分発行